学校訪問

部活動

第九中学校
東尾久２－23－５

生徒が部活動を紹介します

サッカー部

▲３年生最後の夏の都大会に出場を果たしました

私たち九中サッカー部は、現在１年生５人、２年生８人の計13人で活動しています。人数は少ないですが仲が良く、チームワークが良いです。

活動日は火～金曜が練習で、休日や祝日は、合同練習や試合に取り組んでいます。

最初は、仲間同士の声掛けが少なくコミュニケーションが取れていませんでした。練習から意識することで、今ではチームを盛り上げる声だけでなく、チームの動きを修正するような声かけをできるようになりました。

試合では、一点目や二点目を相手に取られてしまうと、チームの調子が下がり、そのまま終わってしまうことがほとんどでしたが、全員があきらめない気持ちを持つことで逆転して勝利することができた時がありました。この時、チームが少しずつ成長してきていることを身をもって感じました。

私たちには、夏の大会までの時間があまりありません。だから、今は「都大会ベスト４」という目標を掲げています。この目標に向かい、日々の練習や試合を頑張っていきたいです。

執筆　部長　２年　鶴島向陽

▲シード権大会では、1、2年生メンバーで優勝することができました

学校自慢

ひぐらし小学校
西日暮里２－32－５

学校の自慢を児童が紹介します

▶みんなが楽しみにしている「ひぐらし祭」

ひぐらし小学校では、６月に「ひぐらし祭」という行事があります。スーパーフレンドリー（縦割り班）ごとにいろいろなお店を開き、６年生を中心に全学年が協力し合って作り上げるイベントです。他の学年の人とペアをつくって、いろいろお店を回るのが楽しいです。

秋には、学芸会と音楽会が一年ずつ交互に行われます。今年度は音楽会でした。一人一人が練習に真剣に取り組み、本番では一所懸命に自分の役割を果たし、みんなの心を一つにし、体育館いっぱいにすてきなハーモニーを響かせました。

これらの行事を通して、助け合ったり誰かに優しくしてもらったりして、受け取った思いやりを「思いやりの音」として全校で共有しています。

これは、ひぐらし小学校が取り組む青少年赤十字（ＪＲＣ）の活動の一つです。他にも、あいさつボランティアやおそうじ・し隊、ユニセフへの募金など、ＪＲＣの目標に合ったさまざまな活動を行っています。

このように、ひぐらし小学校にはたくさんの行事があります。これからもいろいろな行事を通じて、地域の人やＰＴＡの人たちと関わりを深め、素敵な小学校であってほしいです。

執筆　６年　佐藤蓮　坂本千聡　坂入慎悠　林怡慧

▲毎月20日に行われる「おそうじ・し隊」

勤労留学　荒川公園の永久水利施設で防災訓練

２月７日、諏訪台中学校の２年生が荒川消防署の勤労留学の一環として、永久水利施設で防災訓練を行いました。永久水利施設は、現在区内に７か所あります。荒川公園の永久水利施設は地下水を利用しています。

荒川消防署の方に教わりながら、「Ｄ級ポンプ操作訓練」と「放水訓練」を行いました。

▼Ｄ級ポンプの操作を真剣に聞く生徒たち

▲ポンプの先を回すと水が勢いよくでました。水圧がかかり体が後方に持っていかれそうになりました

“社会を明るくする運動”作文コンテスト
三瑞小・山本そよさんが優秀賞を受賞

１月５日、第三瑞光小学校６年の山本そよさんが第67回“社会を明るくする運動”作文コンテストにおいて優秀賞である東京都推進委員会委員長（東京都知事）賞を受賞し、１月10日、西川区長に報告しました。また、50作品以上応募した学校に贈られる奨励賞を、第三瑞光小学校が受賞しました。

▶西川区長に優秀賞の報告をする山本さん

あらかわ今昔ものがたり
あらかわの歴史と伝説
その115　あらかわの春を楽しむ
～桜の名所・日暮里～

今年も桜前線が近づいてきたね。みんな、どこかにお花見に行くのかな？

江戸時代、とても人気のお花見スポットが、あらかわにもあったんだよ。それは日ぐらしの里と呼ばれた日暮里の寺町なんだ（今の西日暮里三丁目）。中でも、花見寺と呼ばれた、妙隆寺・修性院・青雲寺のお庭は、一つの大きな公園のようだったんだって。

日ぐらしの里では、早咲きの桜から遅咲きの桜まで、いろんな桜を見ることができたんだって。「江戸名所花暦」や「東都歳事記」という江戸時代の本によるとね、「彼岸桜」から始まり「枝垂れ桜」「単弁桜」「八重桜」など、長い期間楽しめたんだってさ。仁王門で有名な養福寺、日蓮聖人作の大黒さんをお祀りする経王寺の「枝垂れ桜」は大木で、七面堂がある延命院の「単弁桜」も中々の枝振りだったそうだよ。

先生とお花見に行こう！

当時の子どもたちは、どんなお花見を楽しんでいたんだろう？

手習の師を車座に花の児

これはね、松尾芭蕉さんの弟子・嵐雪さんが詠んだお花見の句だよ。昔、お習字や、歌の先生の声がけで行われた花見があったんだ。先生、子ども、お母さんたち、１００人を超えるグループも見られたそうだよ。お揃いの手拭い・日傘を身につけて着飾るのが流行だったんだって。花見に花を添え、華やかだったろうね。

土器投げを楽しむ

ところで諏方神社の境内は諏訪台と呼ばれ、遠くは日光山や筑波山、近くは尾久や三河島（今の荒川地区）の田園風景を望むことができ、境内は勿論のこと、下の農家の庭先にまでたくさんの桜が植えられていたんだって。歌川広重の錦絵にも描かれ、四季を通して眺めが良い所として知られていたんだよ。

ここで評判だったのが土器投げ。境内で売られている素焼きの杯を、花びらが舞い散る空に向かって投げ、土器が風に舞う様を見て楽しむ遊びなんだ。

花の散るたびに土器それるなり

と川柳にも詠まれているよ。

芭蕉さんと桜

行く春や鳥啼き魚の目は泪

芭蕉さんが奥の細道へ旅立って南千住で詠んだ矢立初めの句だね。芭蕉さんは、深川（江東区）から船で隅田川を遡り、慣れ親しんだ江戸の景色に別れを告げながら千住に向かった。「遠くに霞んで見える富士の山、上野・谷中の桜ともお別れだ。また戻って眺めることができるのだろうか」と、気持ちを述べている。芭蕉さんが旅立った旧暦の３月27日の頃は若葉の季節を迎えていたけれど、芭蕉さんにとって江戸で見た桜の花は、忘れられない春の風景だったんだね。

▶歌川広重　日暮里諏訪の台「名所江戸百景」（荒川ふるさと文化館蔵）

問合せ　荒川ふるさと文化館　☎（3807）9234

R70 古紙配合率70%再生紙を使用しています。